

ハ新刊紹介

大類 伸博士 監修

日本城郭全集 1

北海道・青森・岩手・秋田編

佐藤 仁

戦後二十余年、そして明治百年ブームで歴史に対する関心は止まる所を知らぬ昨今である。特に「城郭」については豪華な安土桃山美術を代表し、その美しい姿を目前に数多く残しているだけに学術的研究面の要ならず、趣味的な面からも親光的な面からも人々の注目を集めている。

このような背景からであるが、昭和三十三年大類伸、鳥羽正雄両博士共著「日本城郭史」の三版が出され、ほど時を同じくして日本城郭協会編「日本城郭全集」全十巻、藤岡通夫博士著「日本の城」(日本歴史新書)などが相次いで発刊され、文庫本でも城をとりあけるものが増加してきた。

今回刊行中の「日本城郭全集」(新)は戦史、武将、歴史、戦国史料など手なく出版している人物往来社の手によるもので、同社の城郭物の中では「日本の名城」(正統編)「名城名鑑」(上、中、下)など一連のシリーズに続く企画である。鳥羽正雄博士ほか多数の城郭研究陣が編集、協力にあたり、大類伸博士が監修しておられ

る本書は全十六巻という大規模なもので、その才八回宛本が青森県を含む「北海道」「本堂専一」「竹村進夫」「岩手県」「山本賢三」「小助川省三氏」「秋田県」「井上隆明氏」が担当、青森県関係は李堂専一氏が二百四十城(館)の整理分類に当たっておられる。内容的には監修の陣に述べられている「日本の名城はもとより、単なる遺跡に及ぶものまで」の如く、弘前城はもとより小笠原頼重館に至るまで時代の別なく五十音順に配列し「城の辞典」を目標としている。この点今迄の城郭発産史的な著書や名城解説的な企画と大きく異なるところである。

青森県関係についてみると城(館)の差定に当たっては沼館三氏著「南部諸城」、小友叔雄氏著「津軽封内城址考」、又ちのく双書「新撰陸奥国誌」などを基礎として、各地の町村誌や向井公民館「三戸地方城跡概略」、千葉寿夫氏著「ふるさとの歴史」、弘前大学国史研究会編「青森県の歴史」などが利用されている。

各城郭の説明は、城(館)名(ふりかた)所在地などに就いて記されている。引用部には古文書名、書名(著

書名）が載せられているので利用の際好都合である。しかし他の巻に比べ実地調査、現地民々の面で不十分を感じてうける特にそれが明白に現われるのは城（館）の読み方であり、若干の例をあげるならば、垂柳館はへすいぐなぎ↓たれぐなぎ、西越館はにしごし↓さいごし、戸目内根夷館はこうめない↓あつめない、戸束館はどらい↓らいのように訂正されるべきであろうし、相内館・一町田館・田子館なども修正の必要がある。特に前の四館の場合配列の位置も変る。いかに読み難い青森県の地名であるとしても、この種の同意いは、城の辞典としての本書の機能を充分果し得なくすると思う。近い将来訂正を望みたい。また城（館）の地形や現状についての説明が少ない点も物足りなさを感じさせるし、紙面に限定はあったほうが写真や平面を入れてほしい。城（館）もある。たとえば蠣崎城・聖壽寺館・浅瀬石城などがそれである。数多い蝦夷も北海道のナベシと同じように一覧表の形で示されたならばより幸いだっと思う。これらの諸点は本書を最も多く利用する市井の研究者や学生層の希望ともつながるのではないかと思う。しかし限られたわくの中で二百四十に及ぶ有名・無名の諸城を整理、執筆することは並大抵のことではない。本館氏の扱われた御苦勞と敬意に対し深く敬意を表したい。青森県内には江戸時代以前の史料は非常に少ない。

文献面での不足を補なうべく城郭や板碑の調査が続けられている。しかし、それらは独立した研究にとどまり、有機的な結合の域に達していない。加えて東県は南部、津軽の二大区域の壁が厚く、各々別個に研究されている。岩手、秋田両県との隣連も見落されがちである。幸い本編は北海道・北東北三県の城郭が一冊にまとめられているので隣接する道、県との隣連を調べるには好都合であるし、五十音順の配列は南部側に津軽を、津軽側に南部をそれ／＼見直させ、今迄の狭い視野から脱した地方史研究一帯に戦国期の研究に大きな刺激を与えてくれる。このところ土木建設工事、宅地造成事業はめざましい。新城（青森）、根城（八戸）周辺の姿は次才に変わらうとしており、城郭の細かい調査の必要を感じつつ本編を読んだ。本編の発刊を期に県内の城郭研究に一段の進歩があれば幸いであり、それが執筆担当者及び関係者に対する最高の謝意になると考へる。

全十六巻、今後とも順調に発刊され、完結することを楽しめる次才である。なお浅学非才のため範囲の取遣いなど失礼な点が多くあると思う。御叱責いただければ幸である。

ハ「日本城郭全集」Ⅰ 人物往来社刊、 千円